

大板井遺跡 33

—福岡県小郡市大板井所在遺跡の調査報告—

小郡市文化財調査報告書第368集

2025

小郡市教育委員会

序

福岡県の中西部に所在する小郡市は、北の玄界灘と南の有明海を結ぶ位置にあり、三郡山地と脊振山地が迫り出す二日市地峡帯の出口にあたることから、古くから「交通の要衝」として発展を続けてきました。人とモノの活発な往来は、当市に新たな技術や文化をもたらしました。また、これらの融合や醸成が当市ならではの独自の文化を生み出しました。これまで市内の発掘調査では、このような交流を裏付ける資料が多数見つかっています。

今回ここに報告いたします大板井遺跡は、大正年間に巨石を持つ墳墓が紹介された、学史的にも著名な遺跡です。昭和 50 年代から行政による発掘調査が始まり、33 回に及ぶ調査成果の蓄積によって、縄文時代から近世まで人びとの暮らしが連綿と営まれていたことが明らかになっています。とりわけ弥生時代中ごろの集落と墓地は特筆すべきもので、隣接する小郡遺跡・小郡若山遺跡とともに、この地域の中心となる集落であったとわかっています。このように、本書をはじめとする文化財調査の報告が、郷土の歴史を解明する一助となることを願ってやみません。

最後になりましたが、今回の調査において地元大板井区のみなさまには多大なご協力をいただきました。記して感謝申し上げます。

令和 7 年 3 月 31 日
小郡市教育委員会
教育長 秋永晃生

例 言

1. 本書は小郡市大板井に所在する周知の埋蔵文化財包蔵地・大板井遺跡地内で計画された、建売住宅建設に先立って実施した発掘調査の報告書である。
2. 本報告書に掲載した遺構図面は調査担当者が作成した。
3. 発掘現場での写真は調査担当者が撮影した。
4. 遺構図面及び遺物実測図の製図は調査担当者が行った。

凡 例

1. 本書で用いた北は座標北を基準とし、図上の座標は国土座標第Ⅱ系（世界測地系）に拠っている。
2. 本書で用いた標高は東京湾平均海水面（T.P.）を基準としている。
3. 本書で用いている略号は以下のとおりである。

掘立柱建物：SB

本文目次

I. 調査の経緯と経過	1
(1) 調査の経緯	
(2) 調査の組織	
(3) 調査の経過	
II. 位置と環境	2
(1) 地理的環境	
(2) 歴史的環境	
III. 大板井遺跡 33 の遺構	5
IV. 調査成果のまとめ	8

挿図目次

第1図 周辺遺跡分布図 (S=1/25,000)	3
第2図 調査地位置図 (S=1/5,000)	3
第3図 周辺調査地検出遺構 (S=1/1,000)	4・5
第4図 1号掘立柱建物 平・断面図 (S=1/60)	6
第5図 大板井遺跡 33 遺構配置図 (S=1/50)	7

図版目次

写真図版	①大板井遺跡 33 調査区全景 (西から)
	②大板井遺跡 33 調査区全景 (南から)

I. 調査の経緯と経過

(1) 調査の経緯

小郡市大板井に所在する大板井遺跡は、九州帝国大学（当時）中山平次郎博士によって紹介された、学史的にも著名な遺跡である。昭和 50 年代から現在まで 32 回の発掘調査が実施され、縄文時代から近世にかけての複合遺跡であることが明らかになっている。遺跡の主体となるのは弥生時代中期の集落と墓地であり、当時のこの地域の中核をなす集落であったと想定されている。

今回ここに報告する調査は、造成済の宅地の 1 区画に建売住宅を建設するにあたって「埋蔵文化財の有無に関する照会」が提出されたことに始まる。宅地造成に伴う新設道路部分は令和 4 年度に発掘調査を実施しており、当地にも埋蔵文化財の存在が想定されるため、施工業者と小郡市教育委員会で協議し、令和 5 年度に発掘調査を実施し、翌年度に調査報告書を刊行することで同意を得た。

(2) 調査の組織

調査に関わった組織と担当者は下記のとおりである。

＜小郡市教育委員会＞

教育長 秋永晃生

部長 熊丸直樹

文化財課長 杉本岳史（係長兼務 令和 6 年 7 月～）

係長 山崎頼人（～令和 6 年 6 月）

技師 上田 恵

＜調査参加者＞ 草場誠子 西 初代 平林昌代 元石みつ

（以上小郡市在住、五十音順）

(3) 調査の経過

発掘調査は令和 5 年 9 月 1 日から同月 20 日にかけて実施した。調査区は遺構検出面までの土を重機で掘り下げ、その後人力で遺構の検出・掘削を行なった。

以下に調査日誌より調査の経過の概略を記す。

9 月 1 日 調査区表土の重機掘削開始。機材搬入。

9 月 5 日 測量作業に要する基準点設置及び座標移動を実施。

9 月 7 日 人力による遺構検出・掘削開始。70 基程度のピット群を確認。

以後、随時遺構の掘削、記録図化を実施。

9 月 11 日 調査区全景写真撮影、測量・図化記録完了。

9 月 14 日 機材を撤収。

9 月 15 日 重機により調査区を埋め戻し。

9 月 20 日 現地引渡し。

以後、図面・出土遺物の整理作業を実施。

Ⅱ．位置と環境

（１）地理的環境

小郡市は、宝満山を源流とする宝満川が貫流し、東側には市内唯一の山である花立山（城山）が、西側には脊振山地から派生した丘陵（通称・三国丘陵）があり、それぞれ南へ向かって緩やかに低位段丘と台地へ移行する。これは沖積地を経由して南下し、筑後平野へと連なる。

大板井遺跡は宝満川の西岸に位置し、三国丘陵から南へなだらかに延びる低台地上に展開している。現在、周知の埋蔵文化財包蔵地としている範囲は南北 1.3 kmに及び、開析谷に囲まれて独立した台地のほぼ全体に広がっている。本書で報告する調査区は低台地の北東に所在する。

（２）歴史的環境

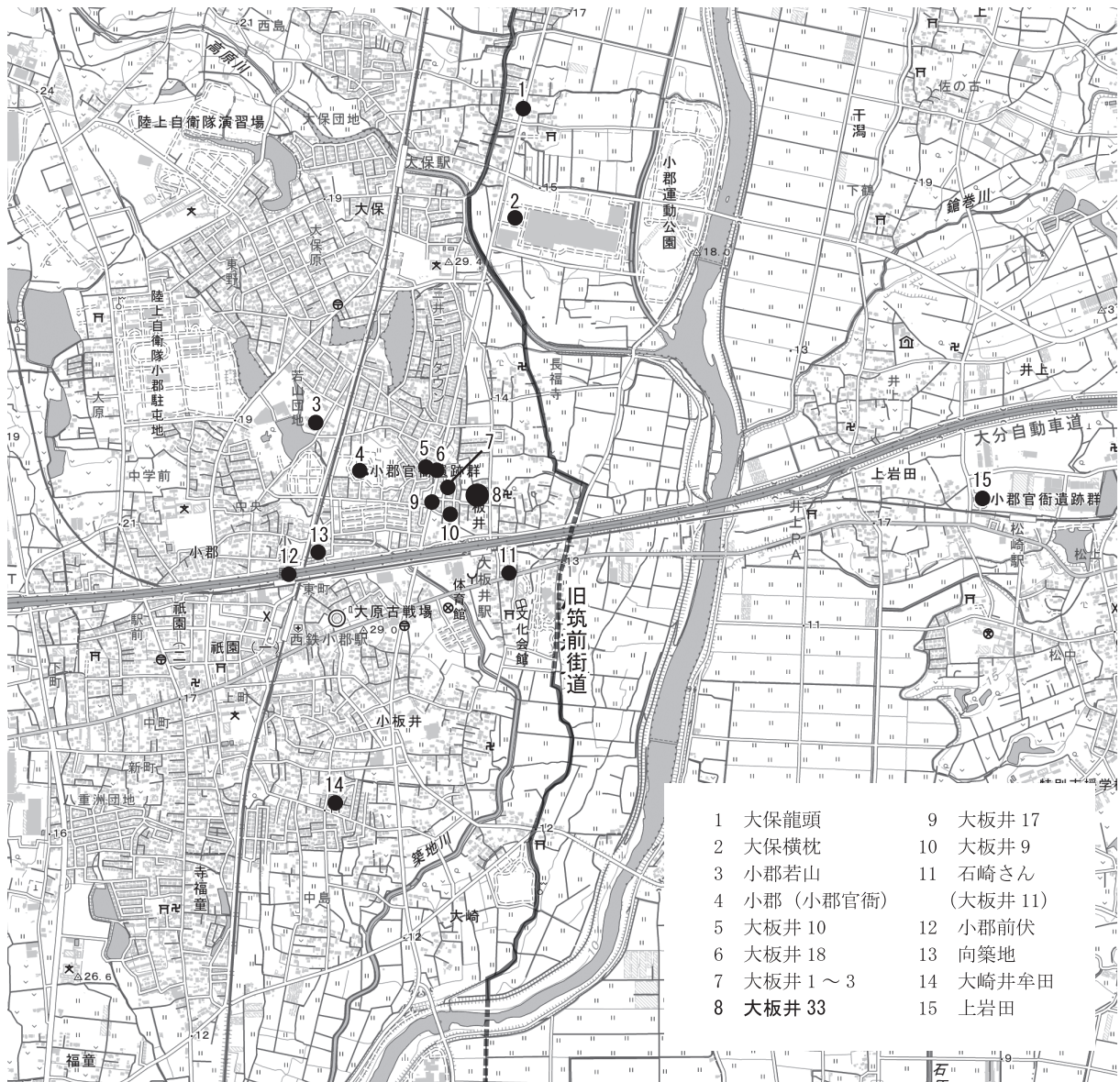
大板井遺跡は、大正 12（1923）年に九州帝国大学の中山平次郎博士による「筑後國三井郡小郡村大字大板井の巨石」という論文で紹介され、広く知られるようになった。この巨石は地元では「石崎さん」（11）と呼ばれ、弥生時代の甕棺を伴う支石墓であると判明している。「大板井」の地名は、平安時代の文献である『和名抄』に記された御原 4 郷の一つである「板井」に由来し、中世には南の小板井や古飯も含めた範囲が板井庄として荘園領主のもとに置かれた。本格的な埋蔵文化財の調査は昭和 56（1981）年に始まり、これまで 33 回の発掘調査が行われている。以下、近隣に分布する遺跡を中心に、歴史的環境の概要を記す。

小郡市内での旧石器・縄文時代の遺構・遺物の確認例は少なく、花立山山麓や大崎井牟田遺跡（14）などわずかである。大板井遺跡 9（10）ではナイフ形石器や台石などが出土している。弥生時代になると三国丘陵を中心に本格的な集落経営が始まり、中期には大板井遺跡 1～3 次（7）の集落が最盛期を迎える。この集落は、狭義の大板井遺跡だけでなく、西に所在する小郡遺跡（4）・小郡若山遺跡（3）をあわせて一連の集落域を形成している。昭和 10（1935）年に現甘木鉄道軌道敷きの土取りの際に出土した銅戈 7 本や、小郡若山遺跡で発見された多鈕細文鏡 2 面を埋納したピット、小郡遺跡で検出した大型円形住居などから、弥生時代中期の拠点集落であったことが判明している。

大板井遺跡の集落は弥生時代後期から古墳時代初頭まで継続し、その後いったん縮小に向かう。その後、律令期に入ると、西隣の低台地に小郡官衙遺跡（国指定史跡 小郡官衙遺跡群 小郡官衙遺跡 上岩田遺跡）（4）が成立する。この官衙は筑後国御原郡（小郡市・三井郡大刀洗町）の郡役所に比定されており、前段階の上岩田遺跡（15）から小郡官衙遺跡、大刀洗町・下高橋官衙遺跡へ移転する官衙として著名である。隣接する大板井遺跡でも、17・18 次調査（6・9）で版築状盛土による造成地が、10・17 次調査（5・9）で正倉群が確認されており、官衙の施設の一部が置かれていたようである。また、向築地遺跡（13）で同時期の集落が、小郡前伏遺跡（12）で官衙へ至る官道と考えられる遺構が見つかっており、当時から繁華な場所であったことがうかがえる。

中世以降も集落は継続し、土壙墓や井戸、区画施設と考えられる溝などが確認されている。出土遺物には中国からの輸入陶磁器が多く、宝満川の水運を利用した交易の可能性が考えられる。また、筑前と筑後を結び、津古―横隈―大板井―大崎―八坂―赤川を経由する街道（旧筑前街道）が成立し、この沿線にも大保横枕遺跡（2）や大保龍頭遺跡（1）といった集落が営まれていた。

このように本遺跡の周辺では、長期に渡り人々の生活が連綿と続けられてきた。



第 1 図 周辺遺跡分布図 (S=1/25,000)



第 2 図 調査地位位置図 (S=1/5,000)

Y=-40850

Y=-40950

Y=-40950

Y=-41000

Y=-41050



- 弥生時代中期の遺構
- 弥生時代後期の遺構
- 古墳時代の遺構
- 飛鳥・奈良時代の遺構

X=44700

X=44650

X=44600

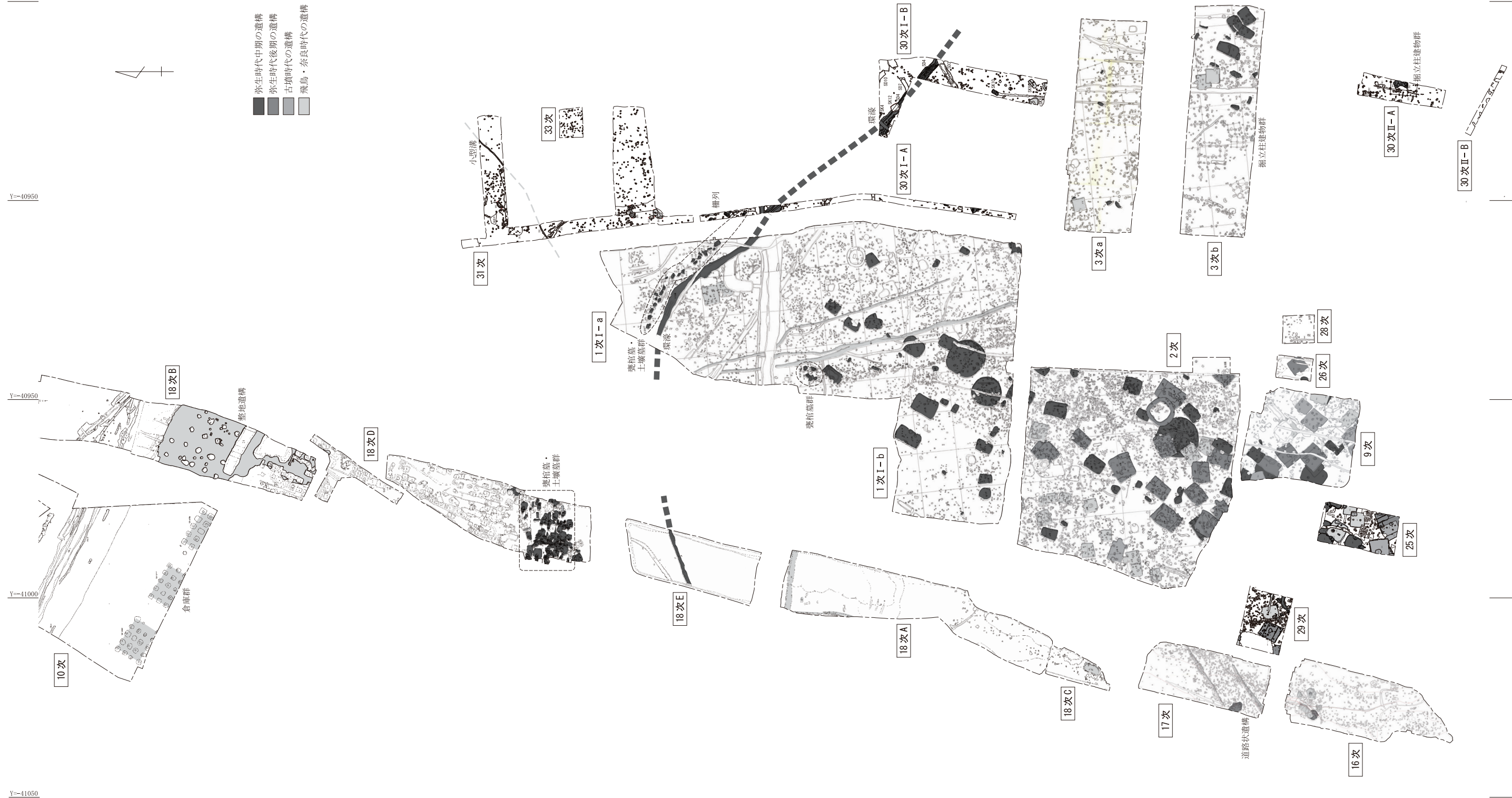
X=44550

X=44500

X=44450

X=44400

X=44350



第3図 周辺調査地検出遺構 (S=1,000)

Ⅲ. 大板井遺跡 33 の遺構

調査区は、令和4年度に調査した31次調査地の隣接地にあたる。31次調査地では、飛鳥・奈良時代の土坑と溝のほか、時期の特定できない堅穴住居の一部分を検出している。大板井遺跡の主体となる弥生時代中期の集落は、所在する台地の北側を蛇行する環濠で区画しているが、今回の調査区はその外側に位置する。

大板井遺跡33の遺構掘り込み面は褐色ローム（基盤層）で、標高は13.1m前後である。宅地として造成された現地表から0.7～0.8mほど掘削を行った。造成土の下層には灰色粘土混砂質土、灰色砂質土、灰黄褐色砂質土、黒色シルトが堆積していたが、いずれにも遺物は認められなかった。

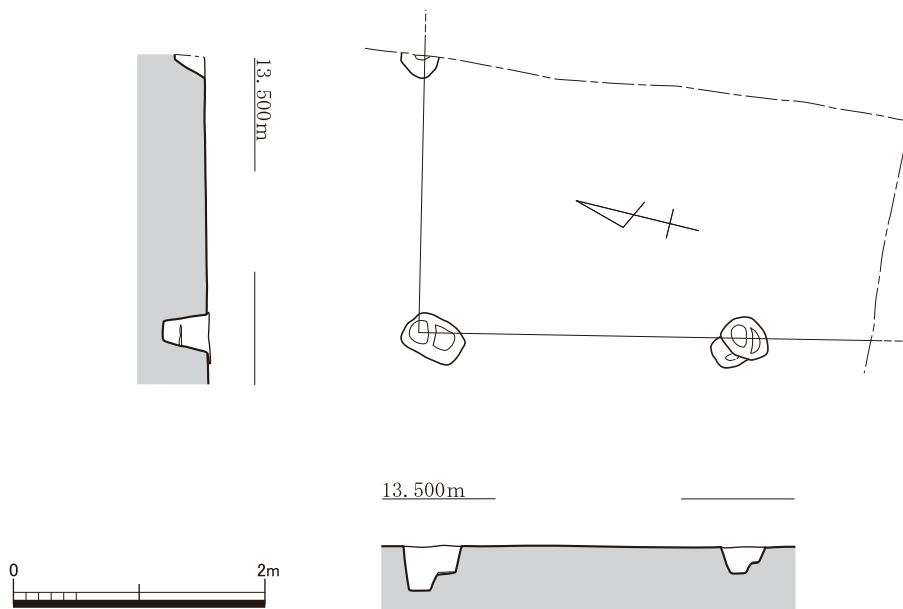
今回調査地においては、掘立柱建物1棟、ピット群を検出した。ピットの埋土は灰色砂質土のものが大半であったが、一部灰黄褐色砂質土、黒色シルトを伴うものも見られた。出土遺物は土師器の小片1点のみであった。

【掘立柱建物】

1号掘立柱建物（第4図）

調査区東側に位置し、東及び南は調査区外へ延長する。確認できた範囲は東西・南北とも1間ずつのため、主軸方向は不明である。柱穴の掘り方は径30～50cmの楕円形を呈する。

現地調査の際には掘立柱建物と認識できず、図面整理において所在を確認したため、柱痕や埋土の堆積は記録できていない。



第4図 1号掘立柱建物 平・断面図（S=1/60）

X=44590

X=44585

Y=-40875



Y=-40880

Y=-40885

第5図 大板井遺跡 33 遺構配置図 (S=1/50)

IV. 調査成果のまとめ

これまでの発掘調査の成果から、大板井遺跡の集落は弥生時代中期を最盛期とし、北から延びる東西幅 550mの段丘上に広く展開することが明らかとなっている。集落の範囲は、小規模な谷を隔てた西側に所在する小郡遺跡、小郡若山遺跡も含み、広義の小郡・大板井遺跡群としては東西 1,000m、南北 700mに及ぶ。

弥生時代中期の遺構が密集し、集落の中心であったと想定される、段丘の西側の既調査地を合成したものが第3図である。このうち 10・16～18 次調査地は、調査時に記録した座標を日本測地系から世界測地系に変換して合成した。また 1～3 次調査地は、調査時の割付をもとに 3 調査地を合体した。そののち、1 次調査地の敷地の南側境界に任意のポイントを設定し、世界測地系座標を検索した上で合成した。9 次調査地も、任意のポイントを敷地の北側境界に設定し、同様に合成している。そのため、1～3、9 次調査地の配置はやや正確性に欠けることをお断りしておく。その上で、当該区域の集落展開と今回の調査地の成果についてまとめたい。

【弥生時代の集落】

弥生時代の集落は、前期中葉に段丘の東から南にかけて成立する。これが前期末に西側へ広がり、中期前半に飛躍的に規模を拡大して、拠点集落としての姿をあらわす。段丘の西側には大型円形住居 3 軒を含む竪穴住居が造られ、その周辺に集落内での祭祀に用いられたとみられる土坑群が配される。竪穴住居の主軸は北東―南西方向を主体とする。集落の北側には 1・30 次調査地で検出した環濠が掘削され、これに沿って甕棺墓と土壙墓、石蓋土壙墓が構築される。中期の集落は主に環濠の内側で展開することから、集落の境界を示す施設と考えられる（『小郡市史補遺編』）。なおこの環濠は、掘り直しを行いながら利用され、中期後葉に埋没する（市 357 集）。

環濠の外にあたる今回の調査区でも、弥生時代の遺構・遺物は認められず、これを裏付ける結果となった。

【飛鳥・奈良時代の集落】

この時期の集落は 7 世紀に段丘の西側に成立し、8 世紀末まで継続する。弥生時代中期と同様に、西に所在する小郡若山遺跡を含めた範囲が集落域と考えられる。竪穴住居の規模は、7 世紀後半まで一辺 4 m 以上であるが、8 世紀以降は小型化し、正方位に近い主軸を取る。掘立柱建物は、居住用とみられる 2 間×3 間の側柱建物と、倉庫棟とみられる 2 間×2 間の総柱建物があり、多くは正方位に近い主軸を取る（『小郡市史第 4 巻』）。竪穴住居は 7 世紀後半に段丘の南西を中心に造られ、8 世紀に入ると南へ下る。

また大板井遺跡から西へ 400mの位置には、古代御原郡衙である小郡官衙遺跡が所在する。官衙の変遷は大きく 4 期に分かれ、Ⅰ期以前、Ⅰ期（7 世紀中～後半）、Ⅱ期（7 世紀末～8 世紀初頭）、Ⅲ期（8 世紀中～後半）と変遷する。このうち最も盛行を極めるのはⅡ期で、計画方位 N-46° -E の建物群が推定方二町の区画内に建設される。続くⅢ期は建物配置を大きく変更し、主軸を真北に取る長方形区画が設置される。大板井遺跡の 10 次調査地の倉庫群は、建物規模や方位からⅡ期に関連するとされてきた。しかし 18 次調査地の整地遺構と一連の施設と考えられ、整地遺構の造成は出土遺物からⅠ期以前までさかのぼることから、性格についての見解は不定となった（『小郡市史補遺編』）。

大板井遺跡で検出した竪穴住居や掘立柱建物の主軸の変化は、官衙のⅡ期からⅢ期への変遷とほぼ同じ時期にあたる。今後検出した掘立柱建物も同様であれば、8 世紀代のものの可能性が考えられる。



①大板井遺跡 33 調査区全景（西から）



②大板井遺跡 33 調査区全景（南から）

報告書抄録

ふりがな	おおいたいいせき							
書 名	大板井遺跡 33							
副 書 名	福岡県小郡市大板井所在遺跡の調査報告							
巻 次								
シリーズ名	小郡市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 368 集							
編著者名	上田 恵							
編集機関	小郡市教育委員会							
所 在 地	〒838 - 0198 福岡県小郡市小郡 255 - 1 Tel. 0942 - 72 - 2111							
発行年月日	2025（令和 7）年 3 月 31 日							
保管場所	〔写真・図面・遺物〕小郡市埋蔵文化財調査センター							
保管場所所在地	〒838 - 0106 福岡県小郡市三沢 5147 - 3 Tel. 0942 - 75 - 7555							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	市町村 コード	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
大板井遺跡 33	小郡市 大板井	40216		33° 40′ 13″	130° 56′ 05″	20230901 ～ 20230920	57.7 m ²	建売住宅 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			
大板井遺跡 33	集落	古墳～古代	ピット		土師器			
特記事項	大板井遺跡群のうち北西部の台地上に位置し、古墳時代から古代にかけての集落域の一部を確認している。西側の隣接地では同時期の土坑・溝を検出しており、一連の集落を形成するとみられる。							

大板井遺跡 33

—福岡県小郡市大板井所在遺跡の調査報告—

小郡市文化財調査報告書第 368 集

編集 小郡市教育委員会
福岡県小郡市小郡 225-1
発行 片山印刷有限会社
福岡県小郡市祇園 1-8-15

